雄鶏：国民的象徴

雄鶏とフランスとの結びつきは、2000年以上前のローマ時代のダジャレに端を発しています。ラテン語の「*Gallus*」という言葉は「雄鶏」と「ガリア人（フランス人）」という二つの意味があるため、よく冗談として使われていました。

雄鶏は、夜明けに夜の闇から陽が出てくるときに鳴くので、キリスト教上でも縁起のいいものとして信じられており、中世にはフランス国王に寵愛されていました。

ボナパルト朝は「雄鶏は力のない鳥だ」と思っていたため、ワシやよく働くと言われているミツバチの方を好みましたが、共和制時代、雄鶏は再び人気を博しました。現在はスポーツの試合でサポーターによく使われ、フランス国民の非公式なシンボルとなっています。

雄鶏と女性・アルフォンス・ミュシャ
1900年ごろの手紙

高尚な文化の花

フルール・ド・リスは、十字やワシ、ライオンの次に西洋紋章において最も人気のある文様です。フランス語から直訳すると「百合の花」という意味がありますが、実は「アヤメ」の絵柄です。槍の絵柄だと思っている専門家もいますが・・・。紋章学は難しいですね。

金色のフルール・ド・リスを撒いた青い盾はフランス王家の紋章です。由来は未だに議論されていますが、フランク王国の初代国王クロヴィスまで遡ります。

王政の象徴であるため、革命後フルール・ド・リスがフランス政府に利用されなくなりましたが、古い家具やタペストリーにはよく描かれており、城や教会といった歴史的建造物を見るとよく出てくる図形です。

大昔からフランスの象徴として知られていますが、現在のフランスでは伝統やエレガンスの象徴にもなっています。

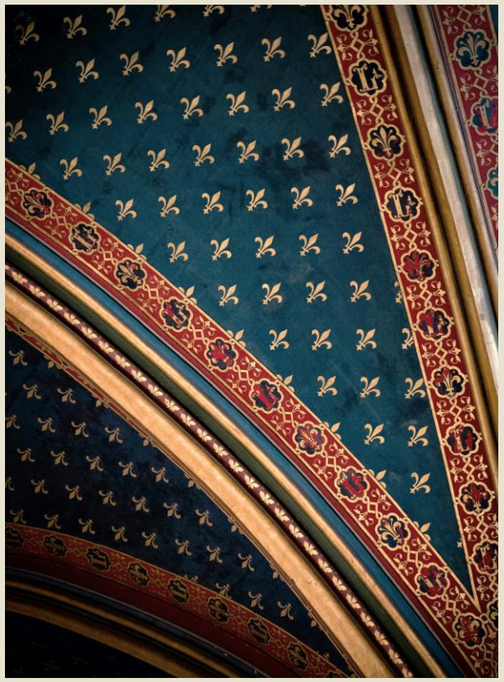
フランス国王の紋章
装飾写本・フランス国立図書館

※*Articles by Charles Durand* デュラン・シャルル

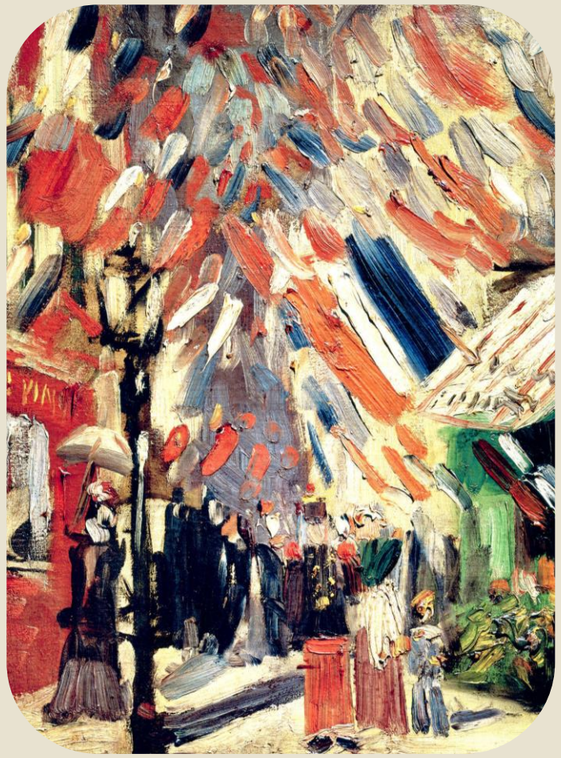
新潟市国際交流協会
〒951-8055新潟市中央区礎町通３ノ町2086
Tel : 025-225-2727
Email : kyokai @nief.or.jp
フランス文化理解講座 :
www.nief.or.jp/ja/node/151

フランス文化通信

Octobre - Novembre - Décembre 2024



青・白・赤



「7月14日パリ祭」 ゴッホ

今回はフランスの色々な象徴についてお話ししましょう！フランス国旗の起源と意味は知っていますか。実はこの有名な青、白、赤の旗の起源が今でも議論されており、多くの解説と伝説が混在しています。今回皆さんにお伝えするのはフランスで認められている公式な解説です。

1789年、フランス革命の真っ只中、アメリカ独立戦争の英雄であるフランス人のラ・ファイエット将軍が帰国し、パリ市役所でパリ市長と国王ルイ16世に迎えられました。ラ・ファイエットがルイ16世に円形章を献上して「この色の組み合わせが間もなく世界で有名になる」と宣言しました。円形章の色は3色で、王政を表す白と、パリ市の色である青と赤でした。パリ市長が「これは君主と国民の同盟を表している」と言ったので、愛国心の象徴になりました。そこでこの円形章を服につけ始める人が現れ、一気に広まりました。

「円形章」

1790年にこの円形章がフランスの商船隊と海軍の旗に使われ、もっと古くから同じ三色を横並びに使っていたオランダ国旗と差をつけるため、フランスは青、白、赤を縦に並べました。

革命後の政情不安によりフランス国旗はたびたび変わりました。復古王政で真っ白になったり、1848年の革命のときに赤旗にする話もありましたが、この三色の旗に対して親しみを感じているフランス人が多く、次第に青、白、赤の旗が王政の白い旗に代わってフランスの国章となりました。

新潟市国際交流協会　「赤旗を拒否するラマルティーヌ」フィリッポトー

「モントルグイユ街」モネ

象徴的な女性

ウジェーヌ・ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」という作品を見たことがありますか。フランス国旗を揚げるこの有名な「自由の女神」は「マリアンヌ」と呼ばれています。彼女はフランス共和国の擬人化です。実際に生きた人ではく、比喩ですね。マリアンヌが被っている三角の赤い帽子はフリジア帽と呼ばれ、旧ギリシャと旧ローマで解放された奴隷がかぶっていたものなので「自由と解放」を象徴しています。現在マリアンヌはアーティストにインスピレーションを与え、胸像が市役所などに設置され、郵便切手を飾ったりすることが多いです。

しかしフランスを象徴する女性はマリアンヌだけではありません。歴史を更に遡れば、今でも信仰や勇気、フランスの愛国心の象徴として知られているジャンヌ・ダルクもいます。「オルレアン市の乙女」とも呼ばれ、実在の人物です。

マリアンヌ、フランス共和政の象徴的存在

1429年、フランス王国の王位継承をめぐってフランスとイギリスが戦った百年戦争の後半に、ただの農家の娘だった17歳のジャンヌ・ダルクが天の啓示を受け、フランス王太子シャルルのもとに参じ、絶体絶命のフランスを救うためにオルレアン市の奪還を促しました。王太子に劣勢のフランス軍の指揮を委ねられ、オルレアン市とフランスの解放に成功した英雄です。

鎧をつけて戦場に出たジャンヌ・ダルクも、ボロボロになった服を着ながら革命を指揮しているマリアンヌも、フランスの象徴的な女性達です。

1429年のパテーの戦いのジャンヌ・ダルク